異界転生譚短編集

長串望

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちらは異界転生譚シリーズの短編集です。

一部は本編で公開されたものもありますが、全年齢向けの短編は今後は基本的にこちらに投稿していくことになると思います。

多くはＴｗｉｔｔｅｒのハッシュタグ遊びで募集したリクエストＳＳです。

たまに本気で書き忘れて放置していることもありますので、リクエストしたけどまだ書いてもらってないんだけどという方がいらっしゃったらお気軽にお声がけください。

異界転生譚シリーズの箸休めにどうぞ。

目次

ゴスリリ１００話記念ＳＳ ―――― 1
ゴスリリ２００話記念ＳＳ ―――― 5
シルマジ１００話記念ＳＳ ―――― 14
【ゴスリリ】オデットとエイシス ―――― 22
【ゴスリリ】日本酒を飲むリリオとトルンペート ―――― 32
【ゴスリリ】少年弓士と白髪の魔法剣士 ―――― 36
【ゴスリリ】妛原家のオムライス ―――― 39
【ゴスリリ】霹靂猫魚のフリカッセ山賊風 ―――― 45
【ゴスリリ】「苦痛に耐えられぬ時くわえるがいい」 ―――― 52
【ゴスリリ】妛原閏、十四歳当時を振り返って ―――― 59

ゴスリリ１００話記念ＳＳ

母が亡くなったという報せを聞いたのは、私が十歳になったある冬のことでした。

季節外れのはぐれ飛竜が、吹雪の向こうから不意に顔を出して、母を一口に食べてしまったのだと、そのように聞かされました。飛竜はそのまま飛び去ってしまい、いまもまだ見つかっていないのだと。

沈痛な顔をした侍女頭から報告を聞いたときに、私の胸に去来したのはあまりにも呆気ないなという、空虚な思いでした。言葉を飾ることもせず、取り繕うこともせず、まっすぐに、ただただ簡潔に知らされた内容に、幼い私はただ、そう、そうなのねと頷くことしかできませんでした。

母が死んだ。

そのことが、うまく噛み砕けませんでした。ただただ頭から丸のみに飲み下してしまって、後からじんわりと理解されていくような、そのような心地でした。

人が死ぬということは、辺境ではあり触れているというほどではないにしても、決して縁遠い話ではありませんでした。春に知り合ったものが、次の春には見かけなくなっていることも、少なからず経験していました。幼心にさえそうだったのですから、きっ

と実際にはもっとたくさんの人たちが次の春を迎えることなく、冬に負けていったのでしょう。

どうして、とか。

なぜ、とか。

そう言った言葉はでてきませんでした。

ただ、もう二度と母には会えぬのだという、その思いばかりがぐるぐるとお腹の中で巡っては消えていき、そして最後にはただぽつんと、母は死んだのだという一言だけが、小骨のように喉元に刺さっていました。

そうでした。

思えば私は母の死に涙一筋もこぼすことがありませんでした。

ただ勘違いしないでほしいのは、それが私が悲しまなかったということではなく、悲しむよりも前にただただ呆然としてしまって、涙を流す機会を逃してしまったという方が正しいように思われました。

それに何より、わたしよりも父の嘆き悲しむ姿が印象的でした。

私がうまく母の死を噛み砕けないでいる間に、死というものに慣れた父は母の死を受け入れ、同時に受け入れ切れず、噛み砕き、なお噛み砕ききれず、飲み下し、その上で臓腑を焼くように焦がれているのでした。

父は冬の氷のようにかたくなな人でした。でもそれは情が薄いからではありませんでした。胸の中の炉の灯を絶やさぬように、ぎゅっと唇を締め上げて、一人薪をくべるような人でした。

父は私たちに涙を一筋も見せませんでした。泣き言もの一つも漏らしませんでした。それでも私たち兄妹は、父の嘆き悲しむ背中を見ていました。父は一言も、ほんの一言も、語る言葉を持ちませんでした。ただ黙りこくって、それが過ぎ去るのを待って耐えているようでした。それは私たちが見る父の初めての弱音だったのかもしれませんでした。嗚咽にならない嗚咽だったのかもしれませんでした。

珍しく良く晴れた日、私は母が消えたという空を仰いでいました。

夜空はどこまでも広く、広く、青黒く広がっていました。そしてそこには宝石をちりばめたような星々や、神々がのぞく覗き穴のようにぽっかりと白々とした月が輝いていました。

人は死ぬと星になるのだと、人族の古い言い伝えにあるそうです。或いは、空の星々こそ、冥府の神のあやす死者たちの寝床なのだとも。

もしそうだとするならば、母の星はいったいどれなのでしょうか。死んだ母は、あの星空のどこにいるのでしょうか。数えても数えきれない星々の中でそれを探すのは、とてつもない徒労のように思えました。

かあさま。

ぽつりとつぶやいた言葉に呼応するように、きらりと星が瞬きました。それはしゅるしゅると尾を引いて、鮮やかに輝きながら南の空へと飛び去っていきました。

流れ星が消える前に三度願い事を言えたら、その願いが叶う。そんなことを信じる年ではありませんでした。

しかし私は確かに、その星に運命を見たのでした。

あの星の落ちた先に、きっと私の運命があるのだと、幼心に私は確信したのでした。

いまでもそんな子供じみた運命を信じているのかと言われれば、そうだとも言えますし、そうではないとも言えます。おとぎ話を素直に信じるほど子供ではなくなりましたけれど、けれど、私は確かにこうしていま星を手にしているのですから。

私の星。星空から零れ落ちた時の歯車。

あなたはいつだって私の胸に、希望を与えてくれるのだから。

ゴスリリ２００話記念ＳＳ

２００話記念、思えば長く続いたものですね。
今回は妛原閏のお話と相成りました。
短いお話ですが、お楽しみいただければ幸いです。

忘れることができない私の人生は、覚えていたくもない言葉で埋まっていて、覚えていたくもない事柄が積もっていて、覚えていたくもない記憶に沈んでいる。
生まれ落ちた時から絶えず積み重ねられてきたそれらがどれほどの毒を孕むものだったか、その結果として今ここに立っている私の為人からなんとなくでも察してもらえると思う。
というか、察してもらえない場合はあえて説明するようなことはしない。したくもない。
なのでご想像にお任せする。
まあ、それでも、こんな人間に育ってはしまったけれど、育った果てに一度は無為に

死んでもしまったけれど、そんな私が曲がりなりにも人間として生きてきて、曲がりなりにも人間として生きていこうなんてトチ狂ったことを考えたのは、考えているのは、そんな毒の沼の中にも確かに美しい輝きがあることを、残念なことに知ってしまっているからだった。

凍り付いた真冬の夜空に煌めく星のように、かそけきながらも確かな輝きが、目の奥でちかちかと瞬く度に、私は諦めきることもできず、信じ切ることもできず、果てない「次こそは」を重ね続けて、大空にも羽ばたけず水底にも沈めず、ただ這いずるように生きてきた。

不器用な生き方だったと思う。

無様な生き様だったと思う。

でもほかにやりようはなかったと思う。

不器用でも。

無様でも。

私は私だった。

それでいいのだと、認めてくれる人がいたから。

子供の頃の私は泣き虫だった。

なんて言っても、今の目付きも悪けりゃ愛想も悪い私からは想像し辛いかもしれな

い。

だからまず、思い浮かべてほしい。

年のころは、まあ小学生、十歳くらい。

その当時なら身長はまだ全然伸びておらず、クラスの背の順でも割と前の方だった。

そのおチビさんは、ずっと俯きがちで、おどおどと視線を迷わせて、人と目を合わせられなくて、人と話を合わせられなくて、何か言おうとしてはいつも諦めている、そんな子供だった。

何をするにしても考えすぎて要領が悪くて、茫然と突っ立ってることの多い子供だった。

なまじ成績が良いのが、まあ子供受けしなかった。

いじめられている、というほどではなかった。

ただ、いい扱いはされなかった。

遊びにも誘われず、時折からかわれ、そしてたいていの場合相手にされなかった。

いまみたいにある種達観してしまうと、その程度のことはどうとも思わなくなるのだけど、当時は何しろピュアなお子様だった閏ちゃんは、ほどほどに期待し、ほどほどに裏切られ、ほどほどに傷つく毎日だった。

泣き虫の閏ちゃんは、嫌なことを忘れられない子だった。

完全記憶能力持ちだから仕方ないねって話じゃない。
ことあるごとに思い出してしまう悪癖があったんだ。
ふとしたきっかけで思い出が刺激されて、嫌な記憶がぶわりと舞い上がるんだ。
学校についてしまったとき、教室に入るとき、教科書の悪戯された落書きを見るとき、苦手な先生の顔を見たとき、下校中に横切る猫を見たとき、そんな些細なことで、嫌なことが思い出された。
寝る前にぼんやりと天井を見上げている時にさえ、それは浮かんできた。
そして思い出は減ることがない。
日々を過ごせば、その分だけ増えていく。
死にたい、っていうほど、強い感情は抱かなかった。
ただ毎日気が重くて、しんどくて、なんとなく嫌だった。
学校を休んでしまえばよかったかもしれないけど、真面目、というよりは、ルーチンワークから外れることが苦痛だったから、嫌な思いをするのがわかっていて、嫌な日々を繰り返してた。
「おとうさん、もういやです」
当時の私は、父の真似をして敬語で喋っていた。
子供心にそれは礼儀正しい振舞いだと知っていたから、いつもそうしようと心掛けて

いた。

あまり中身は伴っていなかったと思うけど。

帰宅してしばらくして、そんなことを漏らした閏ちゃんに、父は優しくなかった。

「何が嫌ですか」

「なんだか、いやです」

「なんだか、というのは」

「いやなんです。しんどい」

「フムン。体がつらいのですか」

口下手でうまく説明できない十歳の私に、父はまるで心中察することもせず、問診を試みてくるのだった。しかし自分自身でも何がどう嫌なのかうまく把握できていなかった当時の私に、父が納得し理解できるような返答は不可能だった。

少しの会話の間に小賢しい閏ちゃんは、やっぱり駄目なんだ、言っても伝わらないんだ、じゃあ言うだけ無駄だし意味がないし止めよう、とあっさり見切りをつけた。

過去の失敗を執拗に思い返す閏ちゃんは、失敗の記憶ばかり思い出すので、できるだけダメージの少ない段階で逃げに移るのだった。

しかし父は空気が読めなかったし、人の心がわからない男だった。

もういいですと言いだそうとした閏ちゃんのちっぽけな体を抱き上げて膝の上に置

くと、上等な櫛で当時から伸ばしていた髪を梳(と)かし始めたのだった。
「え……なに？　なんですか？」
「暦(こよみ)さん……あなたのお母さんも、よく嫌だと言いました」
閏ちゃんの困惑を聞き流して、父は母のことを語り始めた。
父は何か判断に困ると、母の話を持ち出す癖があった。
人間味に薄い父と比べて、話の中の母は大層人間味に溢れる濃い味人間で、おそらくそれを頼りにしているのだった。
「何の生産性も見いだせない、あれが嫌だこれが嫌だこういうの気にくわないあれこれが腹が立った、というような愚痴を、延々と良く聞かされていました。僕に櫛を押し付けて、髪を梳かさせながら、一人でいつまでも愚痴を言い続けるんです」
十歳の閏ちゃんにも、見たことのない母親が大概あれな人種なのではないかと思い始める年頃だった。
そんな人と一緒にされているのかとひそかにショックを受けている閏ちゃんの髪を機械的な手つきで梳かしながら、父は続けた。
「そして言ったら言った分だけすっきりして、あとに残さない人でした。怒りも、悔しさも、悲しさも、言葉に出して吐き出してしまって、それで済ませてしまいました。言葉にすることで、何をどう嫌だと感じているのかはっきりさせることは、胸の中のもやも

やに形を与えて、処分しやすくするそうです」

父自身は全く理解も納得もいっていないらしい理論を、淡々とした口調で説明して、そしてその淡々とした口調のまま、どうぞなどと言ってくるので、私は困ってしまった。

「僕はあまり人の機微や感情には鋭くありませんので、言ってもらった方がわかりやすいですし、ご自分でもすっきりすることでしょう。幸い、僕は共感性に乏しいので、聞き役に徹するのは得意です。サンドバッグと思ってどうぞ」

それきり父は髪を梳かす機械となってしまって、私はどうしたらいいかしばらく迷って、それでもおずおずと「学校が嫌」と言ってみた。父はわかったような返事もせず、もっともらしい頷きもせず、ただ黙々と髪を梳いた。

物足りないような気もしたし、言っても大丈夫なんだというような気もした。

それで私は、あれが嫌だ、これが嫌だと、思い出されるままに嫌を吐き出していった。

それはだんだんと具体的になっていき、細かくなっていき、そして吐き捨てるたびになんだか馬鹿らしくなっていくのだった。

なんで私はこんなくだらないことを気にしていたんだろうって。

そうしてついに、言いたくなることが思いつかなくなって、私は少しの間黙りこくった。

それから喋りすぎて火照った顔を振り向かせて、父に抱き着いた。

「おとうさん、ありがとう」
「はい。お役に立てれば、幸いです」
父は最後まで冷たくて心地よいメンテナンス・マシーンだった。
もっともそのあと、学校に対していじめの確認と訴訟の準備をしようとし始めたので、慌てて止めたけど。
それは煌めきというには地味すぎて、輝きというにはくすみすぎて、瞬きというには平坦だったけど、それでも、それは確かに私の胸の中でずっと私を生かし続けた思い出だった。
父は愛することが苦手で、私は愛されることが苦手だったけれど、それでも確かに、私たちは親子だった。
今も、思い出せる。
まだ赤ん坊だった私に、父はこう言ったのだった。
言葉なんてわかるはずもない、頭も座らないような生まれたての赤ん坊に、父は言ったのだった。
「はじめまして、閏さん。僕は妛原（あけんばら）　軅飛（たかとぶ）といいます。今日からよろしくお願いします。不慣れで不器用だと思いますが、いつかあなたが立派な大人になる日まで、あなたを守り、育て、支えます。僕があなたのお父さんです」

母を亡くして、たった一人になった父は、それでも迷うことなく私の小さな手を握ったのだった。

愚直なまでに不器用なその物語を、私はいまも確かに、受け継いでいる。

シルマジ１００話記念ＳＳ

それは古槍紙月と衛藤未来が、ようやくこの世界に、そして《巨人の斧（トボロ・デ・アルツロ）冒険屋事務所》での生活に慣れてきた頃のことだった。

最初はただだるさがあった。

《白亜の雪鎧》のもたらすかすかな冷気が心地よく、少し腰掛けるだけのつもりがうとうとと寝入りそうになる程だった。

未来としては今日はなんだか眠いなとそう思うだけだったのだが、周囲から見ればそれはとても普通ではなかったらしい。

朝起きて顔を洗おうとすれば盥をひっくり返してびしょぬれになり、体を拭くのもなんだかぎこちなく、何もないところでつまづくこと数度、そして事務所の広間で退屈な午前を過ごしている間に、うたた寝どころかぐっすり寝入って椅子から転げ落ちる。

なにしろ鎧の上からでは詳しい様子はわからないとはいえ、さすがにこうまでおかしいと、はたから見ていてもわかるものだった。

「兄さん、具合でも悪いんですかい」

「そんなことないと思うんだけど」

しかし返した声はどうしようもなく鼻声だった。
慌てる紙月にせっつかれて鎧を脱いでみれば、肌寒いような、暑苦しいような、何とも言えぬ不快感が全身を襲った。
へぷし、とくしゃみが一度。へぷし、と続けて二度。それから首をかしげて、またへぷし、とくしゃみが飛び出た。
「お前、顔真っ赤じゃないか」
紙月は手のひらを未来の額に当て、その温度の高いことに随分と驚いたようだった。ぼんやりとした未来の方でも、紙月の手のひらの冷たさを感じたくらいだったから、温度差は結構なものだっただろう。
もしかして、これは風邪なのだろうかと、未来がぼんやり思い始めたのはようやくその頃になってのことだった。
「大丈夫か、未来？　つらいか？」
「だいじょうぶだよ……」
「全然大丈夫に聞こえない」
鼻声で答えてはみたが、紙月はますます動揺する一方だった。
「ええと、おい、ムスコロ、こういう時どうしたらいいんだ？　医者はどこだ？」
「ただの風邪でしょう。あったかくして精のつくもんでも食えば、」

「医者っているのかそもそも？　それとも神官か？」
「あのですな、姐さん」
「《回復（ヒール）》って迂闊に病気に使って大丈夫なのか？　悪化したりしないか？」
「駄目だこりゃ」
　あんまり紙月の動揺がひどいものだから、未来の治療のためというより、紙月を落ち着かせるために、馴染みだという施療所の施療師と、医の神の神官が呼ばれた。
「お子さんいくつです？」
「じゅ、十一です」
「あらまあ、若いお母さんで」
「俺の子じゃないんです、だから、これがはじめてで」
「はいはい、大丈夫ですからね、すぐ診ますから」
　施療所と言うのはつまり診療所のようなものだったが、元の世界に比べると、できることは少ない。昔ながらの薬草などから薬を煎じたり、傷を清めて包帯を巻いたり、骨接ぎをしたり、そういうことをするのだという。
　子供が熱を出したとなればまず頼るところでもあるらしく、施療師は手馴れた様子で未来を診察した。
　手のひらで熱を測り、鼓動を聞き、腹の音を聞き、脈を量り、息の匂いを嗅ぎ、舌の

色を見た。
「風邪ですね」
医の神の神官というものは、施療所の進化系といったようなものだった。実際、施療所でも医の神は崇めているし、その医療技術と施設の違いくらいが、この二つを分けるものだった。
もっとも、だからといって医の神の神殿の方が施療所より偉いという訳ではなかった。
神殿は何しろ金がかかるものだし、街中にいくつも立てられるほど余裕があるわけではない。
施療所の方が治療費はずっと安くつくし、土地土地にそれに見合った施療所がある。ケースバイケースということだ。
医の神官は何かしらの法術なのだろう、暖かな光を未来の体に浴びせてその容態を確かめた。またそれだけでなく、施療師のように診察もした。
「風邪ですね」
腕のいい施療師と、若手の神官、二人がかりでそう診断されても、紙月はそわそわと落ち着かない様子だった。
「な、治るんですか」

「あったかくして、精のつくものを食べさせてあげなさい」
「下痢をしたり吐くようだったら、清めて、湯冷ましを少しずつ与えなさい」
「薬とか、法術とか」
「治せなくもないですが、そうすると子供の体はひ弱に育ちます」
「私も薬といっても、こういう時は栄養の出るものをとしか」
　おろおろと狼狽える紙月に、二人は顔を見合わせた。
「まず親御さんであるあなたが、大丈夫だよと言ってあげなければ」
「御覧なさい。お子さんの方がかえって落ち着いているじゃないですか」
「うぐ」
　それでも心配する親の気持ちというものお二人はよくよく知っているから、何かあった時はこう対処しなさいという覚書を書き置いて、紙月の肩を抱いて慰めてくれた。
　紙月はちょっとびっくりするくらいの礼金を二人に寄越したようだったが、二人は既定の料金だけを受け取って、次の診察があるからと去っていった。
　いつも二段ベッドの上の段で寝ている未来は、今日ばかりは看病の手間もあるし、落っこちたらとんでもないから、普段は紙月の寝ている下の段に寝かせられた。
　食欲は余りでなかったが、食べなければ元気にならないということはわかっていた。
　紙月が、南部に行った時に買った米（リーブ）とよばれるお米で粥を作ってくれたのは、ありが

たかった。
この世界の食事には随分慣れてきていたけれど、こうして弱った時には、馴染みの味が懐かしくてたまらなかった。
紙月が本当に心配そうに見つめながら、ひと匙ひと匙、ふうふうと冷まして食べさせてくれるもので、気づけば土鍋一杯にあったおかゆを平らげてしまって、少し苦しくなった。
「ご、ごめんな、多すぎたか」
「ううん、ちょうどいいよ」
それでも起きているのがつらくなって、枕に頭を乗せて横たわると、なんだか病人なのだなという自覚がわいてきた。そうして、自覚がわいてくると途端に具合が悪くなってくるような気がした。
紙月が土鍋を片付けに行く間、未来は自分がとてつもない孤独の中に放り出されたような気分になった。事務所の中だから、耳をすませば遠くから冒険屋たちの声や、その動く物音が聞こえては来る。
けれどその遠くから聞こえてくることが、かえって未来のそばには誰もいないのだということを感じさせて、恐ろしく分厚い真綿の壁のようなものを感じさせた。
未来は頭から布団をかぶって、そのこもる熱の中できつく目をつぶった。

暑苦しくてたまらないのに、背筋は寒さに震えた。
全身は汗をかいて湿っているのに、口の中は渇いてつっかえた。
布団の中には、未来自身の鼻づまり気味の呼吸音と、時折せき込む声で満ちていた。背筋からこみ上げる悪寒に対抗するように、湿り気を帯びた体温が充満していた。
そうしてじっと黙りこくっていると、今度は筋肉のきしむ音、骨のこすれる音、そしてまた頼りない心臓が打ち鳴らす鼓動が聞こえ始めた。
そのうるさいほどの雑音も、やがて慣れてくると曖昧に体温に混じり始め、そうしてなだらかにならされて、聞こえないのと変わりなくなっていく。
布団の中に繭のようにくるまって、未来は自分がひとりっぽっちなのだという充足と孤独を同時に感じていた。
一人であることはどこまでも気楽に感じられた。熱も寒気も、体の痛みも喉の痛みも、全てがすべて自分のものだと思えば、ここはどこまでも満ち満ちていた。
独りであることはどこまでも残酷に感じられた。誰とも共有することのできない熱も、誰とも分かち合えない痛みも、全てがどうしようもなく寂しく感じられた。
眠いのか、起きていたいのか、暑いのか、寒いのか、ふらふらと曖昧なまま、未来はまどろみの中であえいだ。
助けてくれと言いたかったのか。

放っておいてくれと言いたかったのか。

いまも未来にはわからない。

ただ、布団の隙間をそっと割り入ってきて、額にひんやりと触れてきた体温ばかりが、その答えのように思われた。

【ゴスリリ】オデットとエイシス

《エンズビル・オンライン》は老舗のＭＭＯＲＰＧだ。

それはつまり、今もそれなりのプレイヤーはいるけれど、全盛期ほどの賑わいはない、そんな半端な環境でもあるということだ。

新規にプレイを始める新人の姿はあまり見られないし、いたとしても長続きするかどうかは、賭けた方が分が悪い。

古参のプレイヤーも環境の変化や、単純な飽き、別なゲームを始めるなど、引退したものは多い。いつか見たプレイヤーが、いつの間にか姿を見せなくなるのは、今となってはよくあることだ。

残っている者たちも、以前ほど精力的じゃない。

プレイヤーが露店を開いてはアイテムを売り買いしていた大通りは、一時期のように露店ウィンドウで埋め尽くされるようなこともない。どこをクリックしても何かの露店に引っかかると言われた混雑具合も、今はそれぞれの露店がほとんど定位置になった縄張りに整然と開かれているくらいだ。

毎週末行われているＧｖＧ、つまりギルド対抗戦も、何かのイベントでもなければ人

数が集まらず、パーティ単位のＰｖＰと大差ない具合だ。ひと時などはサーバー負荷のために、人数制限さえあったというのに、遅まきながらサーバー増設した頃には人はもう集まらなくなっていた。

それでも、寂れているとは言えない程度にプレイヤーたちがすれ違うし、定期的なイベントや、時々のキャンペーン時にはログイン率もぐっと上がる。

今もそうだった。

ほとんど常設になってしまって、もはや何度目かもわからない新規プレイヤー歓迎キャンペーンとやらのために、広告につられてやってきた冷やかしまがいの新人や、キャンペーン限定のアイテム欲しさにサブ・アカウントを作った古参連中のキャラクターがうろついていた。

私も、キャンペーン・イベントの内容を知るためにサブ・アカウントを作ろうかとも思ったけれど、最大レベルのキャラクターでゴリ押しプレイをしている身には、今更せこせこと低レベル帯をうろつく気力はなかった。

どうせ少しもしないうちに、プレイ動画やイベントの概要はネットの海に散らばることになる。そしてそれらはいままで何度となく行われてきたキャンペーンとさほど変わらないだろう。

画面の中で、デフォルメされたキャラクターが動き回る中、半透明に描写されている

のが私の持ちキャラクターであるエイシスだ。《職業（ジョブ）》は《暗殺者（アサシン）》系統の最上位職である《死神（グリムリーパー）》。半透明なのは、他のプレイヤーや敵から姿を隠す《技能（スキル）》を使っているから。

誰にも絡まれず、人様のプレイを眺めながらぶらつく、それが私という人間のプレイ・スタイルだった。

既存プレイヤーでも参加できるイベントを一通りこなしてしまった私は、適当に定めたプレイヤーの後を付け回してプレイングを観察するという悪趣味な日課に励んでいたのだが、この日は早々に切り上げてしまった。

というのも、多くのプレイヤーがキャンペーン・イベント巡りをしているわけで、大体誰を選んでも同じようなプレイを見せられることになったからだ。さすがに飽きた。

もはやガイド・ツアーさえ可能なほどに習熟してしまったではないか。

結局、暇つぶしに足を運んだのは、プレイヤーの最初の拠点となる――そして最もプレイヤーが多くみられる《王都ハルアルファ》、その大通りに面した中央広場だった。

中央広場はよく開けており、転移先として登録されるため、プレイヤーたちの待ち合わせや交流の場所としてよく用いられている。

見渡せば露店を開くものや、パーティ・メンバーを募集するもの、チャットでだべっているのかひとところに集まって動かない一団など、様々なプレイヤーが様々な理由で

ひしめいていた。

そしてその広場の中心辺りにあるステージを取り囲むように、デフォルメされたキャラクターがみっしりと押しかけて場所を取り合っていた。

私もその群衆の間に紛れ込み、腰を落ち着ける。

安物のヘッドフォンを取り出してあてがえば、途端に流れ出すのは、ゲームのＢＧＭではない、アップテンポなメロディと、甘やかで伸びのある声。

ステージ上にただ一人立っているのは、デフォルメされた中でも特に小柄な少女の姿。わずかに地から浮き、背からのびる透き通った羽で飛ぶ姿は、ピクシー種の特徴だ。

彼女を中心に画面を彩る華やかできらびやかなエフェクトの数々は、《踊り子（ダンサー）》の最上位職である《歌姫（プリマドンナ）》の《技能（スキル）》の数々が見せるもの。

彼女はオデット。ピクシーの《歌姫（プリマドンナ）》にして、《エンズビル・オンライン》のライブアイドル。

そして誉れ低き畏怖とドン引きの対象たる《選りすぐりの浪漫狂（ニューロマンサー）》の一人である。

自称「アイドル特化」であるオデットのキャラ育成は、私のエイシスの幸運値（ラック）極振りのようにステータスを偏らせているわけではない。わけではないのだけれど、実用的かと言えば私以上に実用性に欠ける。

オデットの種族であるピクシーは、力強さ（ストレングス）や生命力（バイタリティ）は極端に低いが、素早さ（アジリティ）や

かしこさが高く、魔法関係に上方補正がかかる特性がある。

そのため専ら魔法支援職として後方支援する形が多い。

《踊り子》は踊りや歌といった《技能》で味方にバフを、敵にデバフをかける多芸な《職業》で、攻撃手段には乏しいが、後ろに一人いるだけでパーティはぐっと安定する。

その最上位職である《歌姫》は非常に高い支援能力を持つ、はずなのだけれど、オデットの場合はその《技能》構成がおかしい。

覚えられる《技能》の数には限りがあるため、プレイヤーはそのプレイ・スタイルに合わせて《技能》を選んでいかなければならないのだが、オデットの場合その選択基準が「見栄えがいいか」というこの一点に尽きるらしい。

以前私も見せてもらったことがあるのだけれど、オデットの《技能》はその効果や有用性などまったく目にもくれず、エフェクトが派手だったり目立つものばかりだった。

たまに実用的なものもあると思えば、お目当ての上位《技能》を取るためだけの踏み台でしかなかった。

それだけなら単なるキャラクター・クリエイトの失敗見本でしかないけど、それを「『できるかな』を実際にやっちゃった事例」、「時間の費やし方を誰からも教えてもらえなかった悲劇」、「失敗しそこなった大失敗」、「これそう言うゲームじゃねえから」と嘆かれる《選りすぐりの浪漫狂》の高みにまで押し上げたのは、彼女の恐るべきバランス

感覚と経営手腕のためだった。

当初、辻バフ、つまり通りすがりの他のプレイヤーに支援《技能(スキル)》を無償でかけることでちまちまと経験値と知名度をためていったオデットは、ゲーム内アイドルを自称して動画チャンネルを開設。

歌って踊ってバフするアイドルとして活動を開始した。

動画チャンネルに対する投げ銭は金額をすべて公表し、ゲーム内課金に全額使用。

課金装備やガチャで着々と強化されていき、範囲支援《技能(スキル)》を覚えたのちは中央広場に陣取って現在のライブのひな型を開始。

《技能(スキル)》によって範囲内の観客にバフをかけると同時に、《技能(スキル)》のエフェクトやアイテム使用時のエフェクトを連動させて一連のダンスを構築。その上に、ボイスチャットに登録したメンバーには本人生声の歌唱付き。

最大レベルの《歌姫(プリマドンナ)》の支援《技能(スキル)》をまとめてかけてもらえるライブは、これから冒険に出かけるプレイヤーの実用的にも、またファンとして歌とダンスを楽しみに来る観客の需要にもマッチ。

いまや彼女の別アカウントの《商人(マーチャント)》がライブ・チケットという名目で販売している《羊皮紙》は結構な高値でも即座に完売し、さらなる高額で転売もされているとか。

本来なら緊急時でも出し惜しみするような高額課金アイテムを出し惜しみなく使用

しての支援《技能(スキル)》をチケット代だけでかけてくれるというのは、ガチ勢にとっては十分収支に合うもののようだ。

そういった支援《技能(スキル)》の恩恵を求めてきたガチ勢の周り、《技能(スキル)》の効果範囲外にもひしめく人々は純粋にライブを楽しみに来ているというのだから、つくづく「これそう言うゲームじゃねえから」だ。

なんでアイドルに興味のない私がそこまで詳しいかと言えば、聞いてもいないのに本人が教えてくれたからだ。

ライブが終わって人が散り始めたので、私もそろそろログアウトしようかと思っていると、チャット・ウィンドウがポップし、ボイス・チャットの申請が来る。許可すると、先程まで甘やかに歌っていた声がヘッドフォンから流れ出した。

『エイシス、観に来てくれたんだねー』

【なんでわかった？】

『一人分だけぽっかり空いてたら、姿隠してもわかるって』

《隠身(ハイディング)》は他のプレイヤーから姿を隠すけど、いなくなるわけじゃない。プレイヤー・キャラクター同士が同じ座標に立つことはできないので、密集してしまう環境だと浮いて見えてしまう、ということか。

私がかたかたとキーボードを叩いて応じたので、オデットはよくもまあ舌をかまない

なという早口でまくしたて始める。今日のライブの感想だとか、観客がどうだったかとか、課金額が横ばい気味だとか、まあ、いろいろ。

別にオデットは私にすべてを聞かせるつもりはないし、私もすべてを聞く気はない。要所要所をとらえてもらえればそれでいい、そこだけは強調しておく、というそう言う具合で、ほとんどはオデット本人が好き勝手なことを言っているだけだ。

そしてそれは私が不快に感じない程度の賑やかしになっており、私がなんとなく駄弁りに付き合ってやろうと思う程度の話題だ。

《エンズビル・オンライン》のライブアイドルにして、ギルド《選りすぐりの浪漫狂（ニューロマンサー）》の広報役は、距離感のはかり方がやけにうまいのだった。

オデットが異色の存在であるのは確かだけど、彼女が《選りすぐりの浪漫狂（ニューロマンサー）》に加入した理由は知らない。なんでもギルド・メンバーが客寄せパンダとして雇ったとか、スポンサーなのだとか、いやいやオデットの方が話題のために加入したのだとか、まあ私はその実際のところを聞いたことはない。

聞けば応えてくれるとは思うけど、たぶん実際のところはそんなに面白くもないエピソードが帰ってきそうなので、夢のある現状で維持していきたい。

ほとんど聞き専に徹している私が、なんでまたお喋りなオデットのチャット相手に選ばれたかと言えば、たまたま見つけたからと、そしていいサンドバッグになるからだ。

サンドバッグと言うと語弊があるか。私が余計なことを言わずに相槌だけ打ってくれる、そして文句も言わない、そして誰にも口外しない、そう言う都合のいい相手だからだ。

そんなサンドバッグ扱いをされながらもなぜ私がこのお喋りに付き合っているかと言えば、声がいいからだ。

もう一度言う。

声がいいからだ。

普段、実況動画とかは声が合わなくて観ないのだけれど、オデットの声は、実にいいのだ。甘やかで、張りがあり、伸びがある。そのくせ、キンキンと響くわけでもない。割と作った声であるらしく、たまに地声っぽいちょっと低い声が混じる時もあるけど、それもまたいい声なのだ。

ぶっちゃけ、私が《選りすぐりの浪漫狂（ニューロマンサー）》とかいうけったいな集団に入ったのも、このいい声で誘われたからなのだ。チケット買わなくてもボイス・チャットで声聞けるのは、お得だ。

『幻の産廃職《死神（グリムリーパー）》は実在するのか!?　その正体に迫る！』とかいうクソみたいな企画立てて、目撃情報をもとに登録ログイン・ポイントに三日位張られて取り押さえられて動画撮られたことは絶許だけど、しかし声はいいのだ。

ヘッドフォンから流れる甘い声を聴き流しつつ、私は寝落ちしそうな旨をタイプするのだった。

【ゴスリリ】日本酒を飲むリリオとトルンペート

「まるで水みたいな酒ね」
　というのはトルンペートの評価で。
「はあ、きれいなお酒ですね」
　というのがリリオの評価だった。
　港町ハヴェノは、外国との交易もあるというだけあって、実に様々な品々が市場に並ぶ混沌とした街だった。
　例えばそれは、醤油（ソイ・サウツォ）だったり、香辛料だったり、豆茶（カーフォ）だったり、そして日本酒だったりした。
　最初に見かけたときはまさかと思ったし、実際飲んでみてもまさかという気持ちだったが、これは紛れもなく日本酒、清酒だった。
　西方の島国で作られた酒だという触れ込みで売られていた甕酒で、お値段はさすがにお高かった。
「それでポンと甕で買っちゃうあたり狂ってるわよね」
「他に使う当てがないからね」

「でもウルウ、あんまりお酒飲まないですよね」
「まあ、ちまちまやるよ」
とはいえ、もともとお酒をあまり飲まない方であるし、一人で消費していくのは相当時間がかかる。なので、小さいくせになかなかの呑兵衛である二人にもおすそ分けすることにしたのだった。
東部で購入した名物の硝子製の酒器に注いで手渡してやれば、二人はこの透き通った液体をまじまじと眺めて先のような言葉を吐いたわけである。
確かに、帝国ではこんな見た目の酒はまず見ない。
林檎酒（ポムヴィーノ）にしろ葡萄酒（ヴィーノ）にしろ蜂蜜酒（メディトリンコ）にしろ、また火酒にしろ、何かしら色がついているものだ。
トルンペートなどは本当にこれは酒なのだろうかと疑り深い顔だし、リリオは素直に感心している。
帝国の言葉、つまり交易共通語（リンガフランカ）とやらではサケーオまたはサキーオ、あるいは原料から米酒（リスヴィーノ）と呼ばれているこの酒は、私の感覚では現代の日本酒とそう大差はないように思われた。
トルンペートは舌先に乗せて口に含むように慎重に、リリオは純粋に楽しもうという具合に軽く口に含んだ。

そして吹きかけた。
「んっ!?」
「くふうっ!?」
私としては味が慣れないのかななどとのんきなことを考えていたのだけれど、どうもそうではなかったようだった。
「なにこれ……!?　見た目うっすいのに辛いわね……!」
「思ったより強いお酒ですね、これ！」
それで思い出したのは、清酒は意外と度数が高いということだ。
醸造酒としては、清酒が一番度数高いと以前聞いたことがある。
十五％くらいがよく見かけるかな。高いもので二十くらいもある。
こっちのお酒は、麦酒（エール）がエールだとして三、四パーセントくらい。
林檎酒（ポムウィーン）、シードルも似たようなものか、少し強いくらい。
葡萄酒（ヴィノ）、ワインは清酒に近いかちょっと弱いくらいだけど、水代わりに飲むからか、水で薄めることが多いんだよね。
なので意外と、生の清酒は度数が高いんだ。
お酒にあんまり強くない民族なのに、お酒大好きなんだよね、日本人。
最初こそその強さに驚いたらしい二人も、元が酒に強いから、慣れればすぐに楽しみ

だす。
「果物っぽいというか、甘い感じもしますね。でも甘ったるいって感じじゃなくて」
「米(リーゾ)っぽい感じはないわよね。すっきりしてる」
「鼻に抜ける感じがさわやかですね」
「香甜酒(リクウォーロ)みたいに色々入れましたって感じじゃないのよね」
「削ぎ落していったって感じの突き詰め方ですよねえ」
なかなか気に入っていただけたようで幸いなんだけど。
なんだけど。
「飲み干す気か」
「えー、もうちょっといいじゃない」
「そうですよー」
「はいはい、高いんだから」
酔っぱらいどもの相手が面倒なのは、どの世界でも同じらしい。

【ゴスリリ】少年弓士と白髪の魔法剣士

メザーガという冒険屋は、業界ではそれなりに名の売れた男だった。

故郷である南部ではまず知らないものはいないし、近ごろ事務所を据えている北部でも一目置かれている。事務所を立ち上げる前、流しの冒険屋としてやっていた頃の伝手も、まだ帝国各地に残っている。

それはブランクハーラという偉大過ぎる先達の威光に足元を照らされてきたものではあったが、しかし確かに彼自身が自前の二本の足と剣一本、それによく回る口先で越えてきた道のりの結果だった。

まあ、そのあたりのことを僕が知ったのは、おじさんと旅をして行く上で異様な顔の広さを思い知り、彼のパーティの面々に面白半分にいろいろと吹き込まれたのがきっかけで、それまでは全然全くこれっぽっちも耳に入らなかったので、多分場合によっては僕は生涯おじさんの名前ひとつ聞かないまま終わったかもしれない。

まあ、冒険屋としていくら名を売ろうと、世の中そんなものだ。

移り気な吟遊詩人たちが声高に冒険を謳おうと、地元の連中が何かと頼りにしようと、助けられた人々がありがたやありがたやと拝もうと、結局のところ冒険屋なんて言

うものは金で雇える何でも屋だ。
助けがいるときはありがたく拝みもするが、用がないときは邪魔にさえ思う、そんな存在なのだ。
冒険屋自身だってそんなこと知っているし、わかっている。それでも仕事にあぶれた連中、正業に就けない連中、あるいは戦いしか知らない連中にとっては、それ以外にないのだ。
お前は若いし、やろうと思えばなんだってできる。やりたいことがあったら、俺の伝手で仕事も紹介してやる。おじさんはそう言った。
おじさんは僕を引き取ってくれたけど、最初から冒険屋として育てるつもりはなかった。あくまで僕がやりたいと、冒険屋になりたいのだと、そうお願いしたからしぶしぶ教えてくれているに過ぎない。
冒険屋になりたいなんてのは、ろくでもない話だ。もそっとマシな人生もあるんだぜ。おじさんはそう言った。
僕もそう思う。
憧れとか理想とか、拾ってくれた恩とか、そう言うのを差っ引いてみれば、おじさんだってちょっとばかり名の売れたろくでなしに過ぎない。
それでも僕が憧れたのは、おじさんの口癖のせいだった。

おじさんはことあるごとに、ぼやくようにこう言った。

「仕方ねえなあ」

至極面倒くさそうに頭を掻き、つま先のあたりを見下ろし、半端なため息をついて、それで、それから、いつだっておじさんは足を踏み出すのだった。

世の中には山のように問題が積みあがっていて、きっと誰かがどうにかしてくれると、当事者たちでさえ他人事のように思っている。その誰かが冒険屋なんだと、その誰かこそが俺たちなんだと、おじさんは語った。

僕の命も、仕方ねえなあと拾い上げてくれたその手を、僕は今も忘れない。

【ゴスリリ】妛原家のオムライス

トルンペートが作ってくれるご飯がおいしいので、我らが《三輪百合（トリ・リリオイ）》の食事当番はかなり偏りがちなのだけれど、それでも時々は交代することがある。

単純に役割分担としてそうなったときとか、なんとなくリリオが気が向いたときとか、トルンペートが良く知らない食材や調理法だけど他の二人は知っていたときとか、体調が悪い時とか、とは、そう、いまみたいに、二人が私しか知らない料理を食べたがった時とか。

「本当に、どこの料理なのよ？」

「私の国のだよ」

「だからそれがどこかっていうんだけど、まあ、いいわ」

「きっと妖精郷ですよ」

「妖精郷」

「あー」

「納得されてる」

鉄製のフライパンは重いし、使いづらいし、テフロン加工のものが懐かしくなるが、そ

れでもそれなりに振るってきたからか、最近では無様に焦げ付かせることも少なくなった。

ＩＨ調理機どころか火力の調節が利くガス・コンロもないし、自由に水が使えるわけでもないし、何もかも勝手が違うけれど、何事も慣れだ。

私は何も料理が得意な方ではない。

経験回数で言えば、かなり少ない方だと思う。

それでも、一度見たものは忘れず、それなりに手先も器用だった方で、普通よりはよほど恵まれているとは思う。

家庭科の調理実習を除けば、誰かに料理というものを教わったことのない私でも、なんとか再現できているのだから、これは私の生来のセンスの良さだと胸を張ってもいいのではないかと思う。

そして、記憶元である、真似した先である、相手が良かったということでもある。

私は下ごしらえをした材料、調理用油、完成品を取り上げる皿、そう言ったものを適切な位置に並べていく。

料理は化学だ。

適切な手順で、適切な加工を加えることが大事だ。

最終的な調理工程に至る以前に、どれだけ下準備を整えておけるか、それが料理の良

し悪しに大きく関わってくる。

それが、私が父から学んだことの一つだった。

男手ひとつで私を育ててくれた父は、大抵のことは卒なくこなせる人間だった。

この大抵のことというのは機械的手順によって解決できることという意味であり、空気を読むとか人間的情緒とかいったものに関してはこの私でさえ呆れるほどであったけれど。

赤ん坊のころから、私の口にするものは基本的に父の手になるものだった。

粉ミルクやレトルトの離乳食、外食などの利用もあったけれど、比率としてはやはり父の手作りのものが多かった。

幼いころは疑問にも思わなかったけれど、クラスメイトなどといくらか話すうちに、男親というものはあまり料理をしないか得意ではない傾向にあるということを私は薄々察していった。

勿論、料理や家事を積極的にこなし、むしろ得意だという男親もいるにはいたけれど、父のそれは何か違うような気がした。

別に父は家事が好きなわけではなかった。

そもそも何が好きだったのか今でもよくわからないけれど、趣味でやっているわけではなかった。

私の養育という仕事の一環として行っている、それは業務だった。
そのくせ、私の記憶にある限り、父の家事技術は結構なものであった。
つまり、私が生まれた時からという意味だ。
一人暮らしのうちに身についたものだろうか。しかし果たしてこのロボットもどきが自分のためだけにここまで細やかな家事をするだろうか、と失礼なことを考えたりもした。
結局わからないのでなぜなのかと尋ねてみれば、父は笑いもせずに淡々とこう答えたのだった。
「暦さんは生活無能力者でしたので」
父はどうして母と結婚したのかという疑問よりも先に、この男はどうして結婚できたのかと不審でならなかった。
おそらく父は、母に対してさえこの剛速球ストレートボールを投球制限なしで投げ続けてきたのである。
母が恐ろしく寛容だったのか、それとも母も強肩でキャッチボールならぬドッヂボールを繰り広げていたのか。
それはいまはもうわからない。
父は何の悪意もなく暴言を吐いた後も、何を気にした風もなく私の夕食を作り上げて

見せた。

涙ひとつ流さずに玉葱を微塵切りにし、鶏肉を刻み、私が苦手だったピーマンをこっそり細かく刻んだ。

フライパンでケチャップを炒め、ほぐした冷や飯を加え、具材を投入し、味を調え、ボウルに取り上げる。

卵を割りほぐし、少しの塩コショウとオレガノを加えて、バターを温めたフライパンに広げる。この時少しだけ卵液を残しておく。

そこにチキンライスを形を整えて乗せ、フライパンをゆするようにして卵を巻き付けていく。一周したら、残しておいた卵液で端を留め、皿にそっとスライドさせる。

少し小さめの私の分と、大分大きめの父の分、サイズが違うだけでまったく同じ工程を、機械のように二回繰り返した父は、満足そうな顔をするわけでもなく相変わらずの鉄面皮で、サラダを添え、スープを注ぎ、テーブルに並べた。

食品サンプルのように完璧なそれを思い出しながら、私は記憶よりもいくらか歪なオムライスを三回、皿に盛りつけた。

おお、と声を上げる食いしん坊二人に「待て」をして、私は手製のケチャップで仕上げする。

黄色いオムライスに、真っ赤なハートマーク。

それは多分、母から伝わり、機械的に父に続けさせた、妛原家のオムライスなのだった。

【ゴスリリ】霹靂猫魚のフリカッセ山賊風

ヴォーストにその名も高く知られているかというと、まあ、冒険屋向けの宿として十店舗挙げたらその中には入っているくらいには、ほどほどに知られた店、というのが《踊る宝石箱亭》という宿だった。

いかにも高級そうな名前の割に、宿自体は他と大差ない造りのもので、調度の類も、荒くれの冒険屋どもが入り浸っては呑むので、安さと頑丈さが重視されたそっけない物ばかりだ。

つまるところ他と比べられるような点がこれといって見当たらない平凡極まりない宿であった。

「暇だねえ」

その平凡極まりない宿を、かろうじて冒険屋以外の一般客にも足を運ばせる知名度に引き上げているのが、店主のユヴェーロである。

彼が磨き終えてしまった食器を棚に戻したのが昼前。つまり冒険屋どもは仕事に出ており、一般客もまだ入らない、暇な時間帯だった。

もう少し日が昇ってきて、昼飯目当ての客が入り始めるころには、雇いの給仕もやっ

てくるし、忙しくもなってくるので、退屈などとは言っていられなくなる。
しかしそれは、今ではない。
いまはまだ、退屈なのだった。
しかし、退屈な時間をただ退屈に過ごすというのは、かなりの無駄である。
同じ食器を二度も三度も磨き上げることくらい無駄である。
それでもやっていけるかもしれない。
かもしれないが、そうではないかもしれない。
時が移ろうとともに客層は変わるかもしれないし、他の宿が何か目玉商品を生み出すかもしれない。
となれば、一人ぼんやりと突っ立っているだけでは、間違いなくその流れに置いていかれてしまう。
というほど切迫感のある考えをこの男が持っていたかどうかは定かではないが、どうせ暇なら暇つぶしに何か新しいことでも始めてみようかというくらいには積極性というものがあった。
「最近は売りの霹靂猫魚（トンドルシルウロ）も安くなってきたしなあ」
《踊る宝石箱亭》の名物は、ヴォースト運河で獲れる霹靂猫魚（トンドルシルウロ）という魔獣の料理である。

専らは揚げ猫魚（シルウロ）で、これは小麦粉を卵と水で溶いて林檎酒（ポムヴィーノ）を加えた衣で揚げたもので、たっぷりの芋の揚げ物と一緒に、酢や塩をかけて食う。

尤も、この名物は何も《踊る宝石箱亭》の専売特許ではなく、冒険屋向けの宿であれば、味の良し悪しや調理法の違いはあれど、どこでもやっている。町中で獲れる魔獣である霹靂猫魚（トンドルシルウロ）は、冒険屋たちによって定期的に仕入れられるからだ。

《踊る宝石箱亭》の揚げ猫魚（シルウロ）はその味の良さと、抱えている冒険屋たちの腕の良さ、つまり素材の良さで知られているが、それも他の店舗と比べて絶対的というほどの差ではない。

生け捕りの霹靂猫魚（トンドルシルウロ）が入ったときだけ秘かに出しているサシミは絶妙であり、これには確かな自信を持っているが、人の口に蓋はできないもので、真似をする店も出てきているのは知っていた。

そろそろ何か、新しい調理法がいるとユヴェーロは前々から考えていたのである。

まあ、考えていただけで、実際に重い腰を上げるには時間がかかったが。

例の二人組が阿呆ほど捕まえてきたので、致し方なしに大放出祭りをやる羽目になった日以来、霹靂猫魚（トンドルシルウロ）の相場は大いに乱れた。市場に素材が大量にあふれた結果、価格は暴落とは言わないまでもぐっと下がった。食肉の分も、同様に下がった。

下がったが、しかし、他の冒険屋があの二人組と同じように大量に捕まえられるわけ

ではない。

もとより危険な魔獣なのだ。これを必死こいて弱らせて捕まえてきても、出回った質の良い素材と比べられ、だだ下がりした相場を強いられ、安く買いたたかれるとあって、一時期霹靂猫魚（トンドルシルウロ）獲りの冒険屋たちは青色吐息だったものだ。

それでも彼らがなんとか生き残ったのは、霹靂猫魚（トンドルシルウロ）素材の大量供給があくまでもあの一瞬だけのものであったこと、そして安上がりした素材で防電対策を取った冒険屋たちが巻き返しを図ったことによって、需要と供給が落ち着いたからだ。

いやあ、激動だったなあ、と半分他人事として思い出しながら、ユヴェーロは新調理法を試していく。

といっても、全く新しい調理法を考え出せるほどユヴェーロは料理に身をささげてきたわけではない。

彼にできることといえばすでにある調理法を磨くことと、組み合わせることくらいだ。

玉葱（ツェーボ）を手早く刻み、あれとこれとついでにそれもと香味野菜を刻んでいく。

考えながらなので、行き当たりばったりだ。

熱した鉄鍋に乳酪（ブテーロ）を温め、玉葱（ツェーボ）をしんなりするまで炒める。香味野菜を加えてもう少し。ここで火を入れすぎると、色が出てしまうので、透き通ってくる辺りが限度だ。

汁物(スープ)にしようと大鍋に仕込んであった出汁(ブイヨーノ)を加え、ちょっと考えてから林檎酒(ポムヴィーノ)を目分量で注ぎ入れ、しばし、煮込む。

少し高くつくが、東部の葡萄酒(ヴィーノ)、それも白の方が良かったかもしれないと少し思うが、まあ今更だ。

こととと煮詰める間に、猫魚(シルウロ)を手掛ける。

普段は軽く下味をして、衣をつけて揚げるだけ、精々衣に紫蘇(ペリロ)を刻んで加え香り付けする程度だが、今日は思い切って濃いめの味にしてみる。

卸し金で玉葱(ツェーボ)と大蒜(アイロ)、それにふと思いついて生姜(ジンギブル)をすりおろし、魚醤(フィシャ・サウツォ)に混ぜ込む。味を見て、少し砂糖を加えて調える。

魚醤(フィシャ・サウツォ)は独特の味と香りが売りだが、独特すぎて苦手な客もいる。肉醤(ヴィアンド・サウツォ)か、もっと落ち着いた西方の醤油(ソイ・サウツォ)とやらを仕入れたいところだったが、北部まではなかなか運ばれない。

馴染みの冒険屋であるメザーガの伝手で仕入れられないこともないが、豆茶(カーフォ)などと違って、需要が少なく安価では難しい。

タレに付け込んで下味をつけた後は、普段の衣ではなく、小麦粉を直接はたいて付ける。空揚げというやつだ。

早速揚げようとして、少し考え、もう一種類用意する。粉を変えてみたのだ。さらさ

らとした粉は、小麦の粉ではなく、芋の粉であるという。芋を挽いたのかどうしたのかは知らないが、これで揚げると食感が違うというのである。

慣れているだけに揚げ物はうまいこと仕上がり、その間に鍋の方もいい具合に煮詰まった。そこに⊠油（クレーモ）を注ぎ入れ、煮立たないようにして馴染ませ、味を調える。

なかなか悪くない具なしの乳煮込みだ。

さて、これをおもむろに、皿に盛った揚げ猫魚（シルウロ）に回しかける。

揚げたての猫魚（シルウロ）がじうじうと音を立てるのがまた、耳にいい。

小麦粉で揚げた方は、サクサクとした食感で、煮込みともよくなじむ。

味はちょっと強すぎたかなとも感じるが、悪くない。むしろ少し控えめな煮込みに、力強い芯を与えてくれている。

ただ、少し経つとすぐにサクサクとした感じは失われてしまうので、沈み込むほどかけるよりは、もう少しとろみをつけた煮込みをさっとかける程度がいいかもしれない。

芋粉の方は、ガリッカリッと強めの歯ごたえで、これが顎に嬉しい。煮込みをかけて水気を吸った中でも、じゃくりじゃくりといい音を立てる。

こちらも時間がたつと歯ごたえが失われていくが、小麦粉のものよりずっと持つ。こちらはこのままたっぷりの煮込みと食べたほうが、うれしいだろう。

などと試食を楽しんでいたら、いつの間にやら雇いの給仕だけでなく、腹をすかせた

客どもがなんだなんだと覗き込んできて、ユヴェーロは途端に忙しくなるのだった。

【ゴスリリ】「苦痛に耐えられぬ時くわえるがいい」

普段からキッチリと整理整頓をして、最低限必要なものしか持ち歩かないという人にはわかりづらいかもしれないが、バッグの中からなんでこんなの持ってるんだろうというブツが顔を出すことがしばしばある。

見れば、そう言えばあの時これこれこういう理由で入れたんだったなと思い出せるのだが、その時まではすっかり忘れているのである。増えるポケットティッシュとか、増えるリップクリームとか、増えるボールペンとか。

宿のやや硬めで座り心地のいいソファに腰を下ろして、インベントリの中身をあさっていた私も、そんなブツを発見してしまった。

「あ」

別に大声を出したわけではないのだが、ベッドでごろごろしていたリリオと、うねうねとよくわからないストレッチをしていたトルンペートに耳ざとく聞きつけられてしまった。

なになに、と寄ってくる姿がまた、猫みたいでかわいくもあり、うっとうしくもある。

どうにも雨が酷く宿から出るに出られずに暇を持て余していたのも良くなかった。

私は暇な時間には作業に没頭できる人種だが、リリオは全く持ってそういう思考回路ではない。トルンペートは私と同じように作業に没頭できるタイプだと思うんだけど、何故かこういう時に限って見逃してくれない。

「いや、別になんでもないんだけど」

「なんでもなくはないでしょ」

「なにか面白いものでもあったんですか？」

左右からやいのやいの言われるが、本当に面白いものではないのだ。

思わずそれを隠そうと思って握り込んでしまったが、さっさとインベントリにしまえばよかった。あれは私にしか開けられないし。

二人は目ざとくそれを見つけて、私の手をこじ開けようと左右からわちゃわちゃ手を伸ばしてくる。一人相手なら思いっきり手を伸ばせばこのチビ二人には届かなくなるのだが、二人がかりとなると分が悪い。

幸運極振りとはいえ、レベル九十九だ。トルンペートには腕力で負けることはない。ないのだが、このメイド、人の関節とか靭帯とかの造りに精通していやがるのでワザで攻めてくる。あとは私の脇腹と耳が弱いことも知っている。

リリオの方は単純に膂力が私をオーバーしてる。少なくとも瞬間的には。馬鹿なのか。数値バグってんのか。辺境貴族ってチートなのでは。

なんだか私の方も意地になってしまって大人気なく争っているうちに、緩んだ指からこぼれたそれは、こつんと床に落ちて転がった。
「あ」
「ん？」
「なんでしょう？」
トルンペートがするりと取っ組み合いから抜け出して拾ったそれは、つやつやとしたプラスチック製のアイテムだった。いや、見た目がプラスチックとゴムなだけで、実際はどうか知らないけど。
「うーん？　なにかしら？」
「おもちゃでしょうか？」
二人が手のひらで転がして観察するそれを、何と説明したものか。なぜ持っているか、釈明に困る。困るが、言わない限りこの二人は左右からねえねえと絡んでくるだろう。何せ暇なのだ。
仕方ない。
「それは……」
「これは？」
「……おしゃぶりだよ」

「おしゃぶり」
「おしゃぶり」
空気がもにょった。
「それはつまり……あの、赤ちゃんが咥える……？」
「うん……そのおしゃぶり……」
「えーっと……その……なぜ……？」
「なぜ……なんでだろうね……？」
しいて言うならばそれが《エンズビル・オンライン》のアイテムだからだった。
しかし今回ばかりは不思議な道具の言い訳が使えない。
というのも、このおしゃぶり、正式名称もそのまま《おしゃぶり》には何一つとて特殊な効果がないからだ。なんならステータスもビタイチたりとも変動させない、完全に見かけだけの装備品である。
なぜそんなものを持っているのか!?
ほんとなんでだろうね。
いや、覚えている。
覚えてはいる。
向こうでおっ死ぬちょっと前、露天商で売っているのを見かけて、「あー、赤ちゃんに

なりてー、何にも悩まなくていい赤ちゃんになりてー。ばぶばぶいって好きなだけオギャりてー」などと死んだ目で衝動買いして装備させてそのビジュアルに死ぬほど馬鹿笑いして三分ぐらいして死ぬほど冷めて死にたくなってそのままインベントリに放り込んでログアウトした時の奴が残っているのだ。

ろくでもねえな私。

そんな事情をどう説明しろと言うのか。

黙り込む私に、二人は何かを察したのか気を遣ってくれた。

「あー、うん、大丈夫よ、ええ、大丈夫」

「そうですよ！　あの、なんていうか、そう、そういう時もありますよね！」

「そうそう、なんかこう、辛くなって、赤ちゃんになりたくなる時が……」

「……あります？」

「……や……ぅぅん……人によっては、あるかもだし……」

「そう……そうですよね……」

やめろやめろやめろ！

やけに的確に察した挙句、途中で自分の言葉に自信を持てなくなるのやめろ！

傷ついてる大人がいるんですよ！

とどめを刺された私はもう駄目だ。ソファに沈み込んで死にたみに包まれてあれ。

などと私が沈んでいる間に、二人は想像する限り想像を絶するアホな方向に話を進めたらしかった。

曰く、やってみなけりゃわからない、である。

呼びかけられて顔を上げた先には、暴れるトルンペートを羽交い絞めにするリリオと、リリオに羽交い絞めにされて暴れながらおしゃぶりをくわえているトルンペートの姿であった。

お使いの端末は正常です。

バグったかなと思ったけどリアルだった。

おしゃぶりトルンペートと目が合ってしまい、何とも言えぬ生暖かい沈黙が流れた。

リリオがひょいと軽く投げつけてくるので慌てて受け止めれば、腕の中におしゃぶりトルンペート。私の腕に抱かれて見上げてくるおしゃぶりトルンペート。

どういう絵面だそれは。

マニアックというか、ニッチというか、何とも言えない妙な後ろめたさのようなものが背筋を這いあがった。

そして私は血迷った。

「……よ、」

「よ？」

「よーしよしよし」
「!?」
「トルンペートはいい子でちゅねー」
「!?」
　あやすように揺らしてみると、トルンペートもまた血迷った。あるいは開き直った。
「ばぶう」
「!?」
「まんま、まんま」
「これヤバい奴では？　逮捕されないこれ？」
「えーっと……どっちがですかね？」
「そうか……どっちもヤバいなこれ……」
「おっぱい」
「そういうサービスはしてない」
　結局、その後あらぶったトルンペートによってリリオも私もおしゃぶりをくわえさせられて赤ちゃんにされたし、私はおっぱいも吸われた。

【ゴスリリ】妛原閏、十四歳当時を振り返って

約十九歳。

何の話かと言えば、私とリリオとトルンペート、《三輪百合（トリ・リリオイ）》の平均年齢のことだ。リリオは成人したての十四歳。トルンペートは生まれがわからないけど多分十五、六歳。で、二十六歳の私一人で結構平均引き上げちゃってるな。

なんで急に年齢の話なんか始めたかって言うと、いやなんかこう、ねえ。甘いものは別腹と言わんばかりにデザートをもりもり食べてる二人を見るとね、これが若さか、みたいな気持ちになるものでね。

私も甘いものは嫌いじゃないし、甘いものを前にした人体が胃を蠕動させて文字通り別腹分のスペースを作り出すという話も聞いたことあるんだけどさ。それでも、二ポンドばかりのお肉と、一ポンドばかりの芋と、合わせて一ポンドくらいの麺麭（パーン）と漬物、それにリッター単位の酒を平らげた後に、ふわっふわのホイップクリームがたっぷり乗ったケーキを食べる気持ちは私にはわからない。

あ、いま言ったの一人分ね。一人当たり大体四ポンドの固形物とリッター単位の液体平らげた後のケーキ。なおケーキは六号くらいのを二人で左右から削ってる。ホール

食いとか初めて見るわ。
帝国でも号数で呼ぶのかは知らないけど、大体直径十八センチくらいだから、六号ね。号数×三センチくらい。
私もちょっとは貰ったけど、ほんの二口だ。二人から一口分ずつ食わされた。違うよ。遠慮してるんじゃなくて、見てるだけで胸焼けするんだよこっちは。
ホール食いなんてしたことないけど、普通のカットしたケーキでさえ、ホイップ・クリームの乳脂肪ちょっと重いなって感じることもあったからな、生前は。二十六歳ってまだいう程には年じゃないはずなんだけど、まあ、あれは胃が荒れてたり、不摂生のせいだろうなあ。
いまの体はそう言うのも重たく感じず美味しくいただける健康なものだけど、それでもさすがに二人ほど健啖ではない。二人くらいの年頃でさえ、こんなには食べなかった。私は小食なんだ。
リリオと同じころ、つまり十四歳の妛原閏少女がどれくらい小食だったかと言えば、折角父が持たせてくれた弁当も、半分くらいは同級生に分けてしまうほどだった。
全く小鳥のような小食だったんだよ。
中学二年生というのは、学校にはすっかり馴染んできたけれど、受験のことなんかも考え始めなくてはいけなくて、身体も大人に近づいてきて、色々と複雑な時期だ。私も

当時は子供らしく割と情緒不安定だった。いまでも情緒不安定とかいう正論は受け付けていない。

当時の私は幽霊部員しかいない文芸部に籍を置き、ほぼほぼ貸し切り個室と化した部室で過ごすことの多い引っ込み思案な文学少女だった。ネカフェ難民言うな。

まあそれでも、いまと比べるとずいぶん社交的な方で（当社比）、友達と呼べるような相手もいるにはいた。

女子バスケットボール部の千田（せんだ）　后子（こうこ）というのがそいつだった。どうして女バス部員などというネアカ筆頭みたいなやつとつるんでいたかと言えば、別に私の趣味嗜好とかかわりなく、クラスのお調子者みたいなところがある后子がボッチの私に絡んでくるという構図だった。いや別に、それでうっとうしくて嫌いになるほど根暗の陰険ではないが。

十四歳の閏少女は、お昼は必ず部室に逃げ込んでお弁当を開いていた。そうすると嗅ぎつけてやってくるのが后子だった。お昼一緒に食べようよという奴だ。

私としてはトイレに行くにも食事をするにもなぜどうして女子でグループ作らなければいけないのかはなはだ理解に苦しんでいたのだが、かといって断固拒否などという強気の行動になど出れない気弱な小鳥ちゃんとしては、クラスの人気者に逆らう勇気などなかったのだ。

「また来ました」
「何度でも来るさー。それとも邪魔？」
「邪魔です」
「コンマ２で返してくるし」
勇気などなかったのだ。
まあ、うっとうしくは感じていても、実のところ助かっていたのも確かだった。
后子の女バス部情報はどうでもよかったけれど、クラス内外のニュースをそれとなくお喋りしてくれるので、クラス内鎖国制度を敷いている個人としてはいい情報源だったのだ。関わり合いにはなりたくないが、知っておかないと関わったとき面倒だからね。
そしてもう一つ。
「やあやあ、うるるんのお弁当は今日も、あー、美味しそうだね」
「素直な所は？」
「かわいくて、でかい」
そう、私のお弁当はかわいくて、そしてでかかった。
生きるのは不器用なくせに小手先の技術は何かと器用な父お手製のお弁当だった。
絶対にその手のセンスを持ち合わせていないだろう癖に、雑誌などを読み込んで理論武装した父は、キャラ弁、というのか、愛らしい熊さんの形をかたどったハンバーグと

か、ハート形に切った卵焼きだとか、さくらでんぶその他でデコレーションした顔つきのおにぎりとか、そう言うのを真顔で詰め込んできたのだった。

出てきたことはなかったが、多分頼めば、アニメなどのキャラ弁も作れたことだろう。いわゆる、ＳＮＳで映える奴を。

そしてその映える奴を、アルマイト製のごつい弁当箱に詰めてくるのだった。ドカベンという奴だ。別のＳＮＳで映える奴だった。

后子は自分の、まあ極普通のお弁当を手早く平らげてしまって、その空いた弁当箱を当たり前のように差し出してきた。

そして私も当たり前にそこに自分の弁当を半分ばかり盛り付けてやる。これでようやく普通の量じゃなかろうか。

バスケット・ボールでかなりのカロリーを消費するという后子は、私の弁当を半分追加で食べて、そして後でまた腹が減ったと言い出すのだから、恐ろしく燃費の悪い女だった。リリオみたいなやつだった。

しかも食うのがはやく、私がもそもそと半分のお弁当を食べ終わる頃に、自前のと私の半分とを食べ終えて食後のお茶など楽しんでいた。

「いやー、いつもご馳走様」

「お粗末様、って私が言うものでもありませんね」

「お父さんが作ってくれるんだっけ？　器用だね」
「見た目はともかく、量を減らしてほしいのですが」
　体も大きくよく食べる父は、私にもたくさん食べさせようとして、こんなドカベンを用意してくるのだった。何度か減らしてくれるようにお願いはしたのだが、身体に悪いと言って認めてくれないのだった。
「いやでもさー、うるるんはもうちょっと食べるべきだと思うよ」
「嫌です」
「コンマ２かー」
　私のお弁当を目当てにやってくる女は、いつも同じことを言っては、同じように断られていた。学習能力がないというか、懲りないやつというか、それともお約束とでも言うべきなのか。
　そしてそのお約束はいつもこう締めくくられるのだった。
「ねーねーうるるん、女バス入ろうよ」
「嫌です」
「コンマ２だねー」
「私は御覧の通り小鳥のように弱々しいので、文芸部が精一杯です」
「いやあ、その身体で小鳥は無理があるって」

「死ねばいいのに」

中学二年生、十四歳。

当時の私は、女バスのエースを見下ろして、なんなら男バスも見下ろして、クラスどころか学年全員を見下ろしてなお成長の止まらない身長に苦悩している小鳥ちゃんであった。

なお後で結局お腹が空いて買い食いしてたので、やはり材料を投入するとのびるのだなあ。

と、思い出話などしてみたところ、ようやく腹の満たされた虎二頭は顔を見合わせた。

「小鳥は無理があると思います」

「よねえ」

「君らね」